

平成 29 年度
UR ひと・まち・くらしシンポジウム

UR 技術・研究報告会

特 別 講 演

「ランドスケープから捉えた地歴を踏まえた魅力ある風景づくり ―大阪、堺を事例に―」

概 要 版

【講演者】

公立大学法人大阪府立大学 名誉教授 農学博士

増田 昇 氏



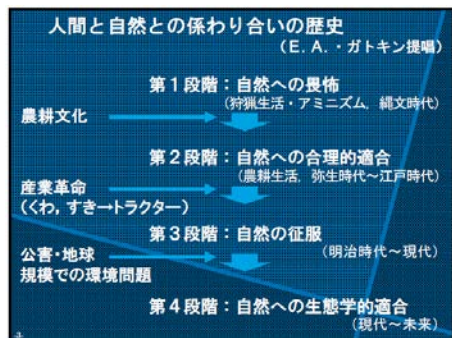
2017 年 10 月 18 日（水）

阪急うめだホール

本日はランドスケープからのアプローチ（風景の捉え方）、そして地歴を踏まえた風景づくりとして、魅力の根源とはどこにあるのかについて大阪と堺市を中心にお話します。

ーランドスケープからのアプローチ（風景の捉え方）ー

○人と自然との関わり合いの歴史

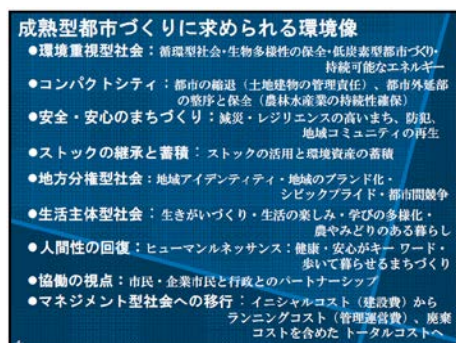


ランドスケープアーキテクトの第一号であるフレデリック・ロー・オルムステッドは、ランドスケープの分野を「人と自然の関係を科学的あるいは芸術的に捉えること」と定義しており、そこが根源であると言えます。

人と自然との関係は、第1段階（自然への畏怖）、農耕生活の中での第2段階（自然への合理的適合）、機械文明による第3段階（自然の征服）、その後、環境問題を背景に持った第4段階（自然への生態学的適合）と展開してきています。地球規模での環境問題を背景に、第4段階の自然への生態学的適合期に具体的にどう進んで行けるのか、

その転換期を世界中が迎えています。現在、自然への生態学的適合期をどう実現していくのが求められています。

○成熟型都市づくりに求められる環境像



これからは就業系主体の都市づくりではなく、生活主体型の都市をどう実現して行けるのか、地方分権の中で、地域のアイデンティティ、ブランド化、シビックプライドなど、それらを発掘していくためのオンリーワンをどう形成して行けばよいのか、あるいは人間サイズのまちづくりという展開論をどう進めて行けばよいのかということが本日の話しの中心になりますが、成熟型都市づくりでは、環境重視型社会、コンパクトシティ、安心安全のまちづくり、ストックの継承と蓄積も求められています。さらに、マネジメント型社会においては廃棄コストまで含めたトータルでの効率性、コストの低減ができるの

かを考える必要がある時期になってきています。安心安全のまちづくりにおいては、阪神淡路大震災をきっかけに防災から減災へ、東日本大震災からはレジリエンスの高いまちへと大きくスタンスが変化しています。またコンパクトシティにおいては、都市の縮退した後の土地をどう管理していくのか、これはまさに農業や林業の活性化と対になります。都市は消費拠点であり、供給拠点がなければ持続しません。都市を持続させようとするならば、その背景にある自然地域を含めた一体的持続性を考えなければなりません。

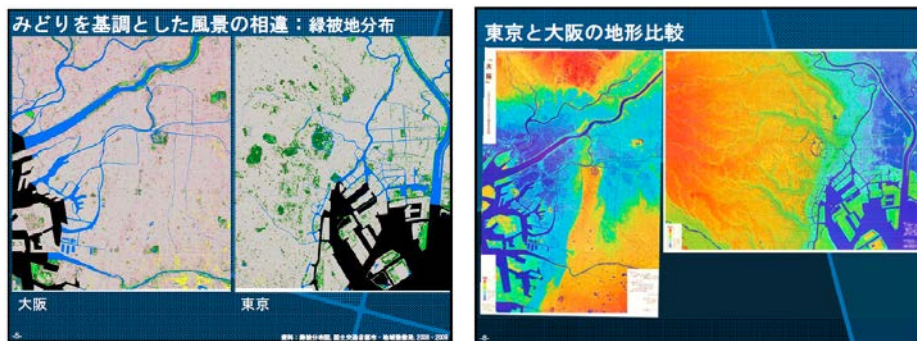
○ランドスケープの基本的認識（風景の捉え方）

景観計画を英語に訳すと、ランドスケーププランニングとなります。ランドスケーププランニングを日本語に訳すと緑地計画、あるいは、緑の基本計画です。現在の行政では景観計画と緑地計画は大きく異なりますが、英語に訳せば全てがランドスケーププランニングとなります。どちらも根底は同じです。このようなスタンスが求められます。

ランドスケープの枠組みのお話をしていきますが、大阪と東京を比較して話をします。東京の方が人口密度は高いにもかかわらず緑も多い。大阪は緑の量が少なくなっています。東京と大阪の気候帯は一緒で、当然、植物が繁茂する力も同じのはずですが、その違いとなる大きな要因の一つは地形です。大阪の市街地は淀川と大和川が合流したところから出来たデルタ地帯、干潟地の埋め立てで成立しています。西側は新田開発によって市街地を形成し、東側は河内湖であったところであり、土壌が悪く地下水位が非常に高い沖積平野です。一方、東京の西側は洪積台地で、谷筋と尾

根筋があり、非常に微地形の発達した土地です。従って、東京にはたくさんの斜面林が残されています。大阪にあるのは上町台地の斜面林のみです。これくらい自然の基盤が違って来ると風景も異なって来ます。さらに、それに対し人間がどのように影響して来たかを、明治期になる前の基盤となった土地利用の形成過程から見ます。大阪は商業都市として発達したため、非常に土地利用が細分化された市街地となっています。一方、東京は下町の日本橋あたりは商業都市となっていますが、西側全体は大名屋敷などの大規模敷地で形成されています。その敷地には緑が蓄積されており、そこが大学や大公園になっています。それに対して大阪は大阪城だけが 100ha の公園になっていますが、それ以外は細分化された市街地です。市街地は一旦形成されると、なかなか転換できない。このようにランドスケープの枠組みから捉えると自然や歴史的な背景が緑の少なさに繋がっているということがわかります。

景観を捉える時、景観がつくられてきた要因を探することで解決策に繋がり、それらはこれからの景観の魅力づくりを考えることに繋がります。



ー地歴を踏まえた風景づくりー

○江戸期の絵図から読み解く風景づくり

名所絵図を見ると、いかに最近の観光マップや環境情報マップが貧弱かということがわかります。今の観光マップでは名所絵図でいう遊興地くらいしか掲載されていません。ところが江戸時代の名所絵図というのは遊興地だけでなく、市場、荷揚げ場、客用船着場など、都市の機能に応じて各名所がきちんと情報発信されていました。これは都市を理解し、その魅力を伝えているということです。江戸期の観光マップ（名所絵図）の一つとして難波百景が描かれていました。そこには堀川を中心とした江戸期の大阪の文化が、水辺を中心に個性や風景づくりがなされてきたか、それはまさに地歴を踏まえた情報になっています。

八軒屋浜（祝祭空間）の名所絵図を取り上げますが、ここには「こと」が全て描かれています。人間がどういった行動をしているか、例えば歓送迎、客引き、水汲み、往来などが描かれています。水汲みからは、汲んだ水が使用可能な水質だったことが読み取れます。こういった行為や、「こと」を受け入れる空間の仕組みが一体的に表現されていることが重要です。また、祝祭空間は川の雁木（階段護岸）と道で構成されている道空間であり、我が国は道文化であるということが分かります。天満青物市場（にぎわい空間）でも、同様に道文化であり、欧州の広場文化ではありません。広場文化はヨーロッパから入って来ましたが、それとは異なり道文化の中でどのように多様な行為が成立するのかということが景観の魅力づくりに繋がっていることが分かります。また、道頓堀・牡蠣船（遊興地）は水面での川の動きとお茶屋の室内からの目線の動きが、にぎわいを生み出しています。水面と雁木上に建てられた建物の関係性が成立して初めて、水辺の活性化が生まれます。蔵屋敷は、全国の藩のものがあつた所です。川辺のパブリックアクセスのために舟入り堀を作ること、水際の公共性が担保されていました。また各藩が銘木を競って植え、それによって個性や風情が成立していました。納涼は大阪の重要な文化ですが、難波橋では橋の上で様々な行為が生まれており、公共の空間をうま

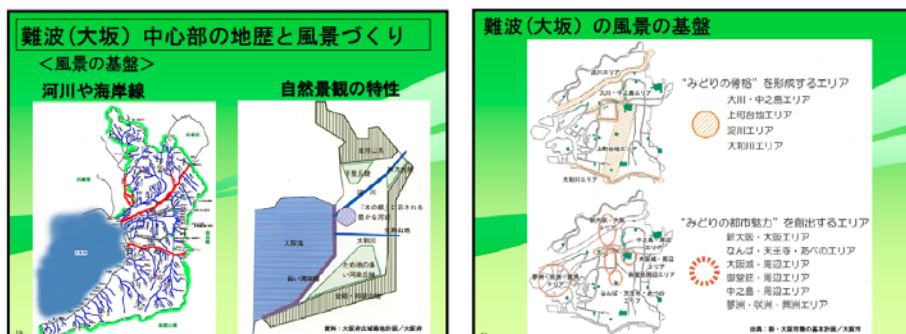
く使いこなしていることが分かります。名所絵図から都市活動が都市の魅力として紹介されていることが分かります。



難波百景と観光ガイドブックを比較した花村君と有本さんの卒論から一部を紹介します。市民 2000 人に対して実施した大阪の好きな風景調査の結果と比較すると、好まれる風景は今でも難波百景に近いように見えます。一方、観光案内内はどちらかというと一般の都市施設は紹介されておらず、消費拠点のこじか紹介されていません。名所絵図では都市活動の魅力を紹介しており、時代を先取りしていることがわかります。消費拠点だけが都市の魅力ではなく、生活、暮らしの形態そのものが魅力であると発信されていることが、江戸期の絵図から読み解くことが出来ます。

○難波（大阪）の地歴と風景づくり

江戸期の話を踏まえ地歴をもう一度見直すと、大阪は水路網が発達していて、元は淀川と大和川が合流したデルタ地帯に成立しています。このような地帯構造や歴史が一体となり、景観資産が蓄積されています。大阪の街道はすべてこれらの地形構造に基づいており、「際」とか「辺」とかと言われるところに街道が成立しています。「辺」は二つあるいは三つの要素の融合した姿であり、多様であると同時に魅力に富んでいます。山野辺は森林の景観と草原の景観の両方の質を持っており、水辺は陸と水面の魅力が共有出来ているハイブリットなところに魅力や、多様性が保有されています。近代では過剰な制御によりつまらない空間となってしまいましたが、今は反対に、どのように融合や多様化をさせていくかということが見直されています。上町台地と淀川、大和川と口の字の水路等、自然基盤が大阪の魅力の根底を構成しています。そこに新たな都市開発が入り、新たな新大阪・大阪エリアをはじめとした都市ができてきています。風景は自然と建物、自然と都市が融合したエリア、あるいは、ハイブリットな空間というところに魅力が感じられます。



次に話を進めますが、2002 年に「大阪人」という都市大阪を紹介する雑誌へ連載をしていた「ランドスケープ in OSAKA」から一部紹介をしていきたいと思います。

まずは「揺れ動く都市軸」として、大阪の都市軸の変化についてお話しします。現在、大阪城は江戸期の位置に安土・桃山期の建物が復元されている状況で、その位置は景観戦略として京街道と船場地区内の高麗橋通りや、平野町通りの交点であり、権力・治世の象徴として大阪城が築造されました。元々は四天王寺という集客性のある都市ポイントと堺の港が意識され、南北軸が形成されています。その後、震災で堺の港が機能しなくなった後は、自ら大川の河口に港を作ったことにより大阪に東西軸ができました。さらに近代に入り、御堂筋という南北軸が新規に建設され、現在まで都市軸は変化してきました。今、求められているのはワンモードではなく、ツーモード、スリーモードというように、モ

ードをどれくらい増やすかということです。今、大阪の再生で言われているのは南北軸か、東西軸かという話ではなく、両方を取り入れた多様なモードの再構造化ということです。大阪のルーツは、このようなところにあたりします。

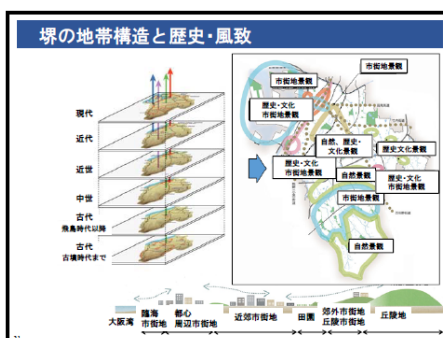


続いて上町台地ですが、ここではしっかりした緑が見られます。大阪は京都に比べてお寺の数は多く、それらが集積しているのは、この上町台地です。大阪城を築造する際にお寺をおいた理由は、お寺が防衛拠点になり、武士の駐屯する場であったからです。

次は大阪の原風景である住吉大社で、海の神様です。海から波が来ると、堆砂帯の裏に内港のようなものが出来て、その内港に渡したのが太鼓橋です。もともと大阪の原風景は、干潟や湿地が広がっているような風景です。その原風景でみられるような水辺がイノベティブに転換されているのが OAP（大阪アメニティパーク）であったり、道頓堀です。

現在の事例として、UR の関目団地ですが、樹木を残しながら建替を行った事例があります。大阪の上町台地には路傍樹が20数カ所あり、区画整理の際に神社やお寺から残された樹木が保存されたものです。受け継がれる緑ということで、日本全国にはこのような路傍樹があり、神格化されたため、絶対に切られない樹木として多く存在しています。同様に、関目団地では昭和30年代に植えられた樹木が大きく育っています。これは非常に大きな魅力で、育った樹木を残すということは30年の時間を買うのと同じです。始めから落ち着いた風景になり、風景を継承することになります。まちを再生する際に、大きな課題となるのが風景の激変です。激変を緩和することが非常に重要で、人間が今まで育って来た環境が激変する時のストレスは非常に大きなものです。如何に風景を継承しながら、再編・更新をしていけるかが、住んでいる人に対しての非常に優しい行為となります。自分が育ってきた環境や風景に対する信頼感、安心感は簡単に破壊してはなりません。

次に、新しいチャレンジとして二次自然を都市にどう導入していくかということがあります。ハワードの田園都市論では、産業革命後の都市問題の中で「農」という概念をどう取り入れて都市開発を進めていくかが試みられました。一世紀経った今、同様に二次自然を代表する「農」を都市改造の中にどう入れていけるかが見直されています。かつて、日本には都市はないと言われていましたが、今やコンパクトシティや、環境負荷の低減などがいわれる中で、日本のように都市の中に「農」という食糧供給拠点や環境供給拠点がある国は類を見ません。自然をどう扱うかということとはとても大切で、人間と付き合える自然を二次自然といいます。アーバンデザインという本の中では「飼いならされた自然」と定義されており、そこに人間や都市との接点や多様性があるといえます。また、大阪では平坦な地形からの脱却として様々な取り組みをしており、天保山は大阪港の築港残土からできており、その他にもたくさん地形を作ってきました。なぜ平坦からの脱却をするかというと、平坦地形ではまっすぐ前方を見ることしか出来ませんが、斜面があると、遠くを見渡す、見下ろす、見上げるという3つの行為が展開されます。世界中を見渡しても、住みたい街や美しい街はすべて坂のあるまちです。それは景観の3つの選択性が多様化を発揮するからです。最後に、大阪ガスの実験住宅も新たなチャレンジであり、ダイビル屋上緑化も日本を代表するチャレンジされた風景となっていますことを紹介しておきます。



○堺の地帯構造と歴史・風致

次に、少しだけ堺についてお話しします。堺は京都や大阪よりもっと古い都市で、地帯構造に応じて文化が発達してきました。明治期はほとんど

が水田で、一部アカマツ林がありました。市街地は区画整理が行われたところや、新住宅市街地開発事業で開発されたところ、農地のところなど、地帯構造に応じて歴史が展開されて現在の堺になってきているといえます。

時代に沿って堺を見ていきます。まずは古代の飛鳥・古墳時代の話になります。地形を見ると仁徳天皇陵古墳が盛り土により丘状の形態が形づくられていますが、中百舌鳥古墳群の築造された地帯は元々微高地となっています。瀬戸内海から入ってきた船からも、古墳を確認できたはずで、瀬戸内航行の戦略として、このような中百舌鳥に古墳が多く作られたと考えられます。また、通常は都市というのは河川港で成立するのですが、堺では瀬戸内海に直接面しているところに港が作られている世界的にも珍しい港町の歴史を持っています。しかし、約 300 年前に大和川が付け替えられて大きく変化しました。住吉大社のお祭りの神輿も陸地続きで、環濠都市内の宿院頓宮まで行けましたが、大和川の付け替えの影響はお祭りだけでなく、金剛山系の土があつという間に港に運ばれ、海岸線が変わってしまいました。その結果、堺の衰退に繋がったと考えられています。

歴史の中で最も繁栄した中世から近世にかけては、利休の茶の湯の起源が残されています。茶道の分派が起こる前が堺なので、三千家が一同に会したお茶会は堺でしか開かれません。また、堺には泉北丘陵から湧き出す泉(井戸)の文化が発展し、造り酒屋も多く、産業とも関連していました。さらに、環濠都市内には鉄砲鍛冶屋敷があり、これが自転車産業や刃物技術に転換されたと考えられます。

続いて、近代から現代の話に移ります。海浜レクリエーションの原点となる大浜公園やもう一つの原点となる浜寺や大美野での住宅地開発が大正から昭和初期に見られます。浜寺は太政官布達による白砂青松の浜寺公園に隣接した別荘地として始まった高級住宅街となっています。大美野は数年前にラウンドアバウト方式が我が国で認められましたが、ヨーロッパの影響を受けてラウンドアバウト方式が採用されていました。次に、近代の堺の象徴である、泉北ニュータウンの話に移ります。泉北ニュータウンは、400 基以上の須恵器窯があつたような泉北丘陵に開発されました。このような丘陵地の住宅地開発は、浜寺や大美野のような歴史があつたからこそです。この泉北ニュータウンは丘陵地形を活かし、完結型の緑道網を持っています。今後のまちづくりの中で、“歩いて暮らせる”ということが最も有利な点ですが、谷筋、尾根筋を読み取り、緑を残したという先進的な造園技術が導入されて、このような貴重な緑道システムが形成されました。一方、海浜レクリエーションのあつた臨海部はどう変わっていったかという、次の段階として臨界工業地帯になりました。今やテクノスケープと呼ばれ、夜間の幻想的な風景となっています。また、その中にある「共生の森」では近代の負の遺産を改善すべく、100ha の森への再生を市民、企業が連携して試みています。

最後に、風景を読み解く、魅力を読み解くと言った時に、人間がどういうことをし、歴史的にどう積み重なり、そこにある自然の基盤とどう関連してきたのかを考えることが重要です。都市とは言え、自然の中に立脚しているのです。このようなランドスケープの基本的な捉え方から都市の魅力の発掘をしていただきたいと思います。また、アーバンランドスケープは、社会的要素としての建物、道路設備、自然的要素としての土地、大気環境や気候、さらに、それらをつないでいるオープンスペースという緑地的要素で形成されています。特に、オープンスペースはこれらの自然と社会的要素を繋いでいて、時間的要素ともなっています。このようなオープンスペースを媒介して、都市や地域の魅力を維持し、再生していくのかを考えて頂きたいと思います。

私の話は以上で終わりです。ご清聴ありがとうございました。